

アジア研究教育ユニット（世界展開力・特別経費）平成 27 年度教育研究報告書

事業課題名	持続的な食と農を考える日-タイ学生ワークショップの開催
代表者名	秋津元輝
事業概要 (600 字程度)	<p>2016 年 2 月 16 日から 23 日まで、タイ国チュラロンコーン大学農業資源学部と本学農学研究科生物資源経済学専攻／農学部食料・環境経済学科との間で、“A New Horizon of Rural – Urban Relationships: Comparative Studies between Thailand and Japan”のテーマのもとに、研究者および学生ワークショップを実施した。さらに、農業資源学部の取り組みに関する現地視察もおこなった。チュラロンコーン大学教員とのつながりは、事業代表者である秋津がこれまで調査および学会を通じて個人的に蓄積してきたものである。2014 年にラオスで開催されたアジア農村社会学会での協議を直接の契機にして、今回のワークショップが実現した。滞在前半の 2 月 17 日、18 日はチュラロンコーン大学バンコクキャンパスにてワークショップを開催した。17 日は、チュラ大側と京大側の研究者がそれぞれ自国の食農状況、新しい都市農村関係の動きに関する研究および現状報告をおこなった。18 日には、チュラ大と京大の学生による研究報告を実施した。19 日からの後半は、農業資源学部のサテライトキャンパスのあるタイ国北部ナーン県に移動し、20 日および 21 日の 2 日間、実習を重視する当学部の取り組みについて、入学者選抜やカリキュラムに関する聴き取り、学生が卒業実習として取り組む地域プロジェクトについての視察などをおこなった。</p>
成果の概要 (800 字程度)	<p>2 月 17 日の研究者ワークショップにおいては、日本とのタイの食と農業、農村の現状、およびそこに存在する課題に対応した研究成果について報告し合い、とくにお互いの課題の共通点を確認できたことの意義は大きい。この研究者ワークショップには学生も出席しており、学生たちにとっては専門用語における英語スキルの向上に資したと考えられる。18 日の学生ワークショップの準備として、日本人学生（学部生・修士課程院生）は日本で外国人教員を指導者として、内容およびプレゼンスキルについて練習を重ねており、準備段階から英語での発信を身につける有効な機会となった。ワークショップ当日にはタイ側の教員からさまざまな質問が出されて、学生らは英語での討議を経験するきっかけにもなった。タイ側から研究報告した学生が他の分野の大学院生ばかりであり、交流対象である農業資源学部の学生との知識交流の機会が少なかったことに課題を残した。しかし、農業資源学部の学生たちもバンコク市内見学をガイドしてくれ、その際の交流をつうじて、学生たちにとっては違った考え方に接する機会となった。</p> <p>19 日からの後半部では、チュラロンコーン大学農業資源学部のナーン県キャンパスで、大学における実習教育とそれに連動した大学による地域貢献の実態について、学生たちとともに視察をおこなった。チュラ大の農業資源学部は農村地域ビジネスづくりの担い手養成を大きな目的としており、入学者は農家かあるいは農家関係者に限られることなど、実効的な人材養成をめざしてユニークな教育体制を構築している。また、2 年間にわたる地域ビジネスプロジェクト実習を必修にしており、卒業生が地元地域に戻って起業するための実践的な教育がめざされている。参加した京大側学生には、そうした取り組みを紹介するために、『農業と経済』誌 2016 年 5 月号のコラム執筆を依頼した。そのため参加学生たちは、チュラ大関係者へのインタビューを実施したり、プロジェクト視察においても熱心に質問したりするなど、主体的な参加を実現することができた。</p> <p>今回の事業は、チュラ大側の丁寧な計画と温かいもてなしに支えられた。今後の両校、両学部の交流を進めるうえで、着実な一歩を記したと評価できる。</p>

